「わかっても、わからなくても」

第１５組長敬寺衆徒　　千葉　悠

私の幼少期には、曽祖母がいました。そして当時、祖母も健在で、私はいつもどちらかのおばあちゃんについて回るようなおばあちゃん子でした。今思い返しますと、なかなか言うことを聞かない、手のかかる子どもであったと思います。母に聞くと、お寺で法要があれば、お御堂へ落ち着きのない私を連れていくのも一苦労だったと言っていました。優しく、また根気よく面倒をみてもらっていたなと思います。礼儀に関しては、母も厳しかったですが、曽祖母は特に厳しかった覚えがあります。

食事をする前は「いただきます」、食べ終われば「ごちそうさま」と手を合わせ言う。食事をするときには箸の持ち方を注意され、左手をテーブルの下にし、箸を持った右手だけで食べていれば、「はるちゃんおててはどうしたの」と、左手はお茶碗や取り皿をもつのだと教えられました。その他にも、出会った人には挨拶をする。お辞儀をする。人に何かしてもらったら「ありがとう」と言い、迷惑をかけてしまったら「ごめんなさい」と言うことなど、私が忘れていれば何度でも注意されました。

当時の私は、それらは何のためにしなければいけないのか。なぜここまで曽祖母は何度も繰り返し言うのかわかりませんでした。曽祖母は私が５歳になる年に亡くなりました。その後も、主に母親に礼儀を教えられ続け、学校で教えられ、たまに曽祖母の姿や声が、フッと思い出されつつ、私自身も大事なことだと思えるようになりました。曽祖母の厳しさは私のためだった。人（他）を敬い、いのちを敬い重んじる事を忘れないようにと、曽祖母の優しい願いをいただき、今も呼びかけていただいているように思います。

真宗の教えもまた、お念仏を大事にされた方々の教えを聞きならい、わからずとも「南無阿弥陀仏」と、ただお念仏申すことからはじまり、多くの人と遇い、教えられ続けることが要であるように思います。教えられていく先に、自身が照らし出され、その先には阿弥陀如来の願いがある。そのことにおのずと頭が下がる。その願いを私自身も心から安心して信じ、おすすめできるよう、お念仏を忘れず大事にしていこうと思うところであります。